

# ソシオグラムによる

## 学生集団の分析

柳 洋 子

### 概 略

学校集団とは、学校を管理機構とし、教職員集団、および、学生集団から、成り立っている全体社会システムである。すなわち、教職員によって、形成されている社会システム、および、学生によって、形成されている社会システムの相互依存が、学校という、全体社会システムの均衡を、維持すると考えて、よいと思う。マクドナルド (F. McDonald) は、学校とは、管理者、教員、生徒という、フォーマルな位置の占有と、各々の役割の組み合わせから、成り立っている、社会システムとして、とりあつかっている<sup>(1)</sup>。すなわち、そこには、二つのフォーマルな組織の存在、ということがあげられる。第一は、制度的な単位による組織、いわば、クラス集団の組織であり、第二は、クラブ組織である。このような、学生のフォーマルな組織活動と、交友グループなど、インフォーマルなものとの、相互依存を通じて、教職員の制度的役割に、どのように学生が、適応して行くか、ということに、マクドナルドの研究意図は、集約されてよいと考えられる。

さらに、この点は、戦後のわが国に隆盛した「集団教育の実践」の意義に、つながるものといえよう。ともあれ、学校集団を対象とするばあい、その対象の社会的な地位——小学校、中学校、あるいは、大学——によって、さらに、研究の目的——実験心理学の分野、あるいは、制度研究の分野——にしたがって、その方法論が、考えられなければならない。

ここで、私は、短期大学部の女子学生を対象とし、学生集団<sup>(2)</sup>の分析に焦点を、あわせよう

と思う。端的に言って、集団の形成と、存続という二つの過程の究明である。さらに、この点は、グループダイナミックスの集団移行 (group locomotion) の問題にも、通ずるものであるが、直接の関心は、対象とした、学生集団に生じている、きわめて支配的で優越的な、二つの問題にあった。第1は、地方出身の学生と、東京および近県出身の間に生ずる緊張、第二は、その影響によって生じる、小グループの存在と、固定性、それにともなる緊張、であった。これらの問題は、短大設立以来、伝統的で支配的なものとして、学生集団に顕在的なものといえる。換言すれば、この二つの点が、対象となった、学生集団の凝集性を、左右するということが、作業仮設となった。

### 註

1. F. J. McDonald, Educational Psychology 1959. P653
2. 対象となったのは、B女子短期大学部の学生である。調査期間は昭和35年4月より36年6月にわたり昭和35年入学の181名が調査対象となった具体的な分析の中心は60名の1つの組に限定し (ソシオグラムにあらわすばあい) たが全員が回答をするように考えこの期間中に5回、合計41設問を用紙配布によって調査した、各回とも中心は知己テスト、ソシオメトリックテストにあて他に入学動機、目的、自治会活動への参加状況、学生生活の諸問題、講読誌、流行に対する関心、時事問題への関心などを附加した。

### <1>

まず、第1の点は、入学にともなる、二つの集団像の出現、という表現に、置換される。す

なわち、寮生集団と、通学生集団がそれである。前者は、地方文化を背景とし、後者は、都会文化を背景としているわけである。もちろん、ここで用いる、文化という概念は、その本質を、伝統的思考にもとめ、形相化された思考方法、それから生ずる、感情や相互作用、あるいは、シンボルや、形に示された、工芸品のようなものを含む、という程度のものである。マス・メディアの発達によって、地方文化の表面上の、大きな変容は、みうけられるが、やはり、今日でも、寮生と通学生という、二つの集団像をつくり出す、一つの要素になっていると考えられる。具体的に、私は、この原因を、つぎの二点に、集約しようと思う。第1に、新しい生活様式への適応の問題、第2に、新しい友人関係形成の問題、である。第1の問題は、寮生にとっては、大きな問題である。すなわち、かつての、家族単位の生活様式には、なかったような、きびしい生活時間の画一性——起床、および就寝時間、点呼、門限などの規則——に対し、好むと、好まざるとに、かかわらず、適応することが、強要される。この点は、通学生にとっては、あまり問題にならない。第2に、新しい友人関係形成、の問題である。まず、寮生にとって、つぎのことがいえる。とくに、高校生活というのは、女子の生徒にとっては、きわめて、どくどくと思われる、感傷的な友人関係を、形成する時代である。観点をかえれば、友人関係は、家族と同じくらいに、直接的で、親密なもので、いわば、第1次集団の範疇に、入るといえる。したがって、それに伴う孤独感を味うことになる。他方、通学生のばあいには、高校時代の友人とは、距離の点からも、近いということで、いつでも会える、という安心感がある。いわば、心理的な友人関係の持続を、可能にしているわけである。しかし、このことに関しては、一般的に、新しい結合関係へ、入るばあい、必ず、ある程度の葛藤がある、ということと照合する必要がある。すなわち、まず、予想される、新しい友人関係の方が、これまでのものと、比べてみて、よいか、

わるいかは不明である。つぎに、その友人関係の将来についても、その結果の安定、不安定について、不明である。いわば、相互作用の継続と破棄の、評価基準となってくる、比較基準——現在までの関係に対する評価——と、2者択1の比較基準——現在の関係を、維持するか、破棄するかの評価——の問題に、つながるわけである。あきらかに、通学生のばあいには、新しい友人関係に対する、葛藤は強いといえる。したがって、2つの比較基準については、相対的に、従来の方が、高いと考えられる。しかし、寮生のばあいには、物理的距離から、生じる損失——文通、郷里での再会など——が、相対的に、大であることは、否めないようである。もちろん、相互の価値、および、態度の類似が、物理的距離の損失を、減少させる、ということが、可能であるとしても、すでに、新しい生活様式への適応に、直面させられている、寮生にとっては、新しい友人関係を、形成し促進することの方が、より報酬が大になる可能性が、きわめて濃厚なわけである。このような点を、端的に表現するならば、寮生は、高校時代の友人関係を、破棄する傾向にあり、通学生は、それを維持しようとする傾向がある、ということになるであろう。

さらに、寮生の方は、近代的な校舎や、設備、すなわち、物質文化に対する、順応の速度と、言語、習慣というような、非物質文化に対する、順応の速度の差から、生じてくる不安が大きく、ある意味では、このことが、寮生間の態度の類似を、つくり出し、ひいては、寮生間の結合を、促進する要因ともいえる。しかし、寮という、生活様式は、なによりも、対面（face to face）の生活であって、ソシオメトリーでは、重要な要素である、接近した距離、および、いっしょにいる時間の長さ、という条件を充している。またこのことは、これまで論述した諸点に対し、かなり支配的な要素ともいえる。

ともあれ、学生の入学に伴い、クラス編成が行われ、ホマンズ<sup>2)</sup>のいう、外的システムが確立するが、入学直後、すでに、寮生と通学生と

いう、2つの集団像が形成され、それにともなって、緊張が見られるわけである。したがって、集団形成過程にあって、これら2つの集団像が、どのように融合するか、あるいは、並存するか、ということの究明が、必要となってくる。なお、ここで附記しておく問題として、下宿からの通学生の性格がある。これは、分析途上、あきらかになったことであるが、端的にいうと、入学当初は、寮生の集団像の性格をもつが、入学後、半年を経ると、通学生の集団像として、とらえることが可能になってくる。さいわい、数にして60名につき、5名前後の数であるから、記述上は、通学生の範疇に、入れることにした。

註

1. J. W. Thibaut & H. H. Kelly, The Social Psychology of Groups. 1959 P21—2
2. G. C. Homans, The Human Group 1950

<2>

いわば、入学にともなって、出身地という背景をもとに、新しい生活様式への適応、新しい友人関係形成の2点から、2つの集団像が、異質のものとし、クラスという外的システムに、生じてくるということがわかった。これらの前提にもとづいて、第2の問題、すなわち、小グループの形成と、その固定性について論述しようと思う。これは、さらに、2つの問題を派生する。すなわち、小グループが、2つの集団像と、どのような関連をもつか、ということと、それらの小グループは、成員数の変化をとまなうものか否か、また、他の小グループとの交流の有無、についてである。いわば、2つの集団像と、小グループの関連についての究明、といえよう。すなわち内的システムの分析、に入るわけである。このばあい、分析方法としては、モレノによる、ソシオメトリーの理論体系<sup>(1)</sup>をふまえ、とくに、知己テスト、ソシオメトリックテストによる設問、ソシオグラムによる、分析という方法を用いた。これらの方法は、集団構造の心理的側面の分析に、かなり有効なもの

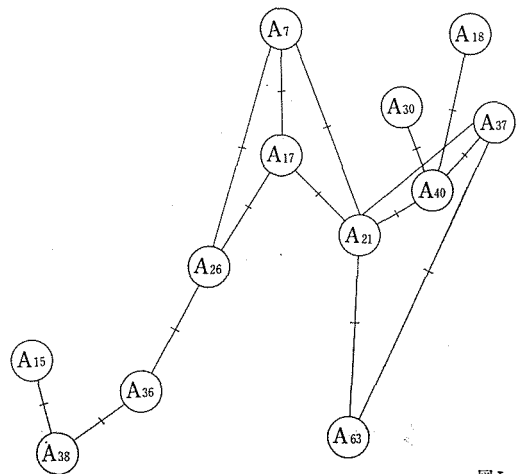
であり、戦後、わが国の学校教育の面においても、とくに問題児の発見の手段として、あるいは、職場における労働者の配置転換にも、しばしば応用されているものである。まず第1回の知己テストを、入学後4日目に行った。これは、つぎの設問形式を用いた。

あなたはいま幾人のお友だちを知っていますか  
 そのお友だちの名前を書いて下さい  
 そしてそのお友だちと同じクラスがどうかいっしょに並んでいるかどうか書いて下さい。

そして、さらに、寮生のばあいなど、入学式の数日前に、入寮をするわけであるから、当日は、すでに知己であることも、考えられたので、つぎの設問を用意した。

あなたが入学式の日を知っていたお友だちについてつぎのことを書いて下さいそのお友だちの名前、そのお友だちとの関係—同県人・同寮の人・受験の時に並んだというように—幾人でもけっこうです

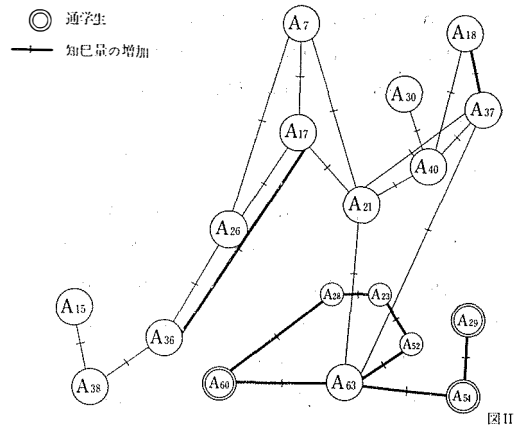
この結果、大別して、同じ出身地、同じ出身校、同じ寮、という回答が、寮生側に多く、同じ出身校、入学試験の時に並んでいた、という回答が、通学生側に、多くみうけられた。そして、具体的に60名のクラスで、入学式当日と、4日後では、12名の例外を除いては、知己量の増加がない、ということも分った。つぎのソシオグラム<sup>(2)</sup>は、第1回の知己テストの一部分の結果を、示したものである。図Iから、一見して、わかることは、寮生の方が、知己量が多い、ということである。A<sub>17</sub>A<sub>21</sub>A<sub>40</sub>を中心とし



図I

た、知己の関係は、12名から、成り立っていて、クラスAの5分の1の学生が、包含されているわけである。さらに細分すると、 $A_{21}A_{17}A_7$   $A_{26}A_{36}A_{38}$ は、同寮同室で、 $A_{30}$ が他室であることがわかる。これは、いずれも、同じ寮に、所属していることが、知己の理由になっている例である。他に、 $A_{33}$ と $A_{51}$ は、同じ高校の出身、 $A_{46}$ と $A_{45}$ は、受験の際に並んでいた、という理由によっている。したがって、ここで、これらの知己の関係が、インフォーマル・グループ形成のばあい、潜在的な性格のものであるか、否かという関心が生じてくる。ともあれ、入学後、4日目に、すでに、寮を中心とした、寮生同志の結合関係がみられ、通学生側には、そのような結合関係がない、ということがわかる。そして、寮を中心とした、ということは、 $A_{21}$ はじめ、6名の出身地別構成によって、説明されよう。すなわち、 $A_{21}$ は高知、 $A_{17}$ は広島、 $A_7$ は宮城、 $A_{26}$ は北海道、 $A_{36}$ は石川、 $A_{38}$ は熊本出身である。このことは、出身地という要素よりも、同寮同室である、ということの方が、知己の強い要素となっていることを、証明しているといえよう。さらに、6名とは別の寮に所属しているにもかかわらず $A_{15}$ が $A_{38}$ と知己である理由は、2人とも熊本の出身で、同じ高校の同期生である、ということによるものである。他方、 $A_{21}A_{63}A_{37}A_{40}A_{30}A_{18}A_8$ という結合は、 $A_{21}A_{63}A_{37}$ が、それぞれ異なる寮に、所属しているが、高知の出身で、同じ高校の同期生であり、 $A_{30}A_{40}$ も広島出身で、同じ高校の同期生である。 $A_8$ と $A_{18}$ も、異なる寮に所属しているが、富山の出身で、同じ高校の同期生である。そして、出身地および、高校の同期などという、脈らくがないにもかかわらず、相互に知己である、 $A_{40}$ と $A_{37}$ 、 $A_{18}$ と $A_{40}$ は、いずれも同じ寮に所属している。このように、相互に知己となる、直接の契機は、多かれ、少かれ、同じ出身地、同じ高校の同期生、同じ寮への所属、ということになる。そして、とくに、ソシオグラムからは、寮生の方が、集団関係の進化の速度と、範囲が大である、という点が強調されてよ

からう。観点をかえて、主観的に分析するならば、寮生は、1日中、生活を共にするわけであって、とくに同室であるばあい、相互作用の頻度が多く、生活によって、さまざまな感情、行動が生じ、それらに新しい要素の相互類似、または、相互依存が加わり、新しい、価値と態度が作り出され、それによって、結合関係を促進する、ということになる。ともあれ、これらの結合関係が、このままの状態、封鎖的な性格をもつものであれば、とうぜん、クラス集団の凝集度を低くし、集団志気にも、影響を与える、ということは、容易に考えられる。では実際に、そのような傾向があるだろうか。さらに、入学後2カ月目のソシオグラムを、みてみよう。図IIは、2カ月後のソシオグラムの一部分



である。前述の12名を中心みると、知己量増加は、 $A_{18}$ と $A_{37}A_{17}$ と $A_{36}$ の2つである。その他に、クラス全体のソシオグラムにおいては、かなりの増加がみうけられるが、とくに、 $A_{63}$ について、分析してみよう。 $A_{23}$ と $A_{52}$ は、 $A_{63}$ と同一の寮に所属している。 $A_{60}$ と $A_{54}$ は、それぞれ下宿よりの通学生である。そして、とくに、 $A_{54}$ と $A_{60}$ は、クラス全体のソシオグラムにあっては、 $A_{54}$ は、他の下宿通学の学生と、相互に知己の状態にあるが、 $A_{60}$ は、そのような状態を示していない。そして、全体ソシオグラムの分析結果は、とくに、居住形態による、結合関係が強い、ということが、強調される。この点は、二カ月後のソシオグラムの要素として、居

住形態と、物理的距離の近接、ということをおいて、結論づけてよいといえる。では、具体的に、これまでの分析による、知己の状態がそのまま、小グループの形成に対し、潜在的な性格をもつものかどうか。この問題は、かなり、複雑な分析が要求される、ものであった。まず、入学後6カ月目（通常、知己量は、180日前後に固定するものとみなされている）に、ソシオメトリック選択をさせた。このばあい、知己の関係と、ソシオメトリック選択の結果の相関関係を中心に、副次的には、各クラスの凝集度を、知るということが、当面の問題であった。

**設問** これから6人1組になって一着のウェディング・ドレスを共同製作することになったと仮定して下さい（デザインの選択から作品完成まで6人でやり必ず学校で時間中にやることにします）1年生だけでやります

さらに、共同製作を望む5名と、拒否する5名の名前と理由を書かせた。この結果、まずクラス集団自体の関心度<sup>(3)</sup>は、分析中心となっているクラスAは、44%であった。すなわち、凝集度が、きわめて低いことがわかるわけである。これは、1つの目標へむけて、集団移行をするばあい、集団意気がきわめて、低く、成果があがらない、ということの意味している。他方、選択の理由であるが、多いものとして、自分より、技術がすぐれている、奥いセンスのもち主である、などが上げられ、ついで、同じ寮に所属している、ということがあげられている。そして、さらに、知己のソシオグラムと照合した結果、相互に共同製作の相手として、みとめ合ったのは、2人の組み合わせで、4組しかなかった。そして、60名のうち、誰からも選択されなかったのは、6名であって、誰も選択しなかった、学生はなかった。したがって、一方的な選択が多い、ということがいえる。とくに、A<sub>21</sub>という学生は、知己テストでは、最初から、上位に位置していたにもかかわらず、誰からも選択されないことが、とくにわかった。つぎに、授業時間中の席順との関連であるが、この問題の性格から、対象とする時間は、いくつかの机にわかれ、比較的、長時間を過す授業でなければ、

ならないことがわかった、したがって、その条件にかなった、被服構成の時間の席順を、とりあげた。この結果、知己のソシオグラムと、相関々係を示したのは、12名にふくまれている、A<sub>7</sub>A<sub>21</sub>A<sub>36</sub>A<sub>17</sub>のみであった。しかし、共同製作のための相手として、この4名は相互に、選択し合っていないことがわかった。すなわち、この例にみられるように、同一の寮にいて、同一の部屋に所属する、学生同志は、相互に知己である、という要素をもつにもかかわらずそれは、共同製作や、授業中の席順に、関係しないものである。

このことは、つぎのような結論を導く。端的にいってしまえば、学生個人の技術が、問題になる授業体系の属性、によるものといえる。したがって、席順についてみても、入学当初は、同室の学生同志、あるいは、同じ方向からの通学生同志など、いわば、知己テストの結果を示した、ソシオグラムそのままが、被服構成の授業時間の席順と、関連をもつことがわかるが、6カ月経つと、各々の技術の程度が、お互いに明白になり、技術や進度の類似した、学生同志が、同一の席を占める、ということが、きわめて、自然に行われる。いわば、共同製作、席順という、2つの指標は、知己テストが、小グループ形成に、直接の関連をもたない、ということを示している。

つぎに、小グループ折出のための、直接の手段として、学生のいう「私のお友だち」と「私のグループのメンバー」という表現のちがいが、という点に着眼し、つぎの設問を用意した。

あなたはグループを作っていますか いる いない  
グループを作っているばあいつぎの点に答えて下さい  
何人のグループですかメンバーの名前とクラスを書いて下さい

中心になっていると思われる人の名前とクラス

この結果は、とくに、寮生によって、形成されているもの、通学生によって、形成されているもの、に、明白に2分される。

図Ⅲは小グループの状態であるが、それらが、どのような規準によって、結合し形成されているかを、検討してみよう。



通の友人ということも、このグループには、みうけられない。まずA<sub>33</sub>とA<sub>51</sub>が、東京出身で、同じ高校の同期生であることが、核になる大きな要素である。入学当初から、この2人は、完全なダイアデックグループで、A<sub>33</sub>は、入学当初の成績は4.3で、A<sub>51</sub>は3.8、性格は、A<sub>33</sub>がリーダー格としての強さをもつが、A<sub>51</sub>は、単に明かるい性格ということで、趣味も、前者は、スポーツ競技への参加、後者は、茶華道というように端的にいうなら、日常行動において、A<sub>33</sub>は積極的で、A<sub>51</sub>は消極的な態度を示している。家族構成についてみると、A<sub>33</sub>は、両親と3人兄弟、A<sub>51</sub>は両親と2人兄弟で、2人とも弟をもち、姉妹がいない。家の職業は、A<sub>33</sub>が薬局経営、A<sub>51</sub>はアパート業である。そしてなお、2人の家の所在地が、同区内であって、距離も比較的に近い、ということがわかる。そして、学校においては、授業中も同じ机に坐り、種々の行動を共にする関係にある。どちらかというと、A<sub>33</sub>がA<sub>51</sub>に対して、全ての行動において、報酬をあたえる、という立場にあって、A<sub>51</sub>に対して、運命統制、および行動統制の行使を可能にしている、とみなしてよいと思う。したがって、補完性による結合関係である。さらに、A<sub>41</sub>とA<sub>54</sub>は、下宿からの通学生であって、とくに、A<sub>54</sub>は高校時代に、学級委員長で、リーダー格の学生である。そして、A<sub>60</sub>は静岡の出身で、高校卒業後、地方の服装学院に入学し、2年間技術を取得した技術面では、経験のある学生である。家族は、両親と5人兄弟である。A<sub>60</sub>の入学動機は、「人間の知的向上」という点に、集約される。そして、性格も円満で、指導性に富んでいる。このような点は、いきおい、A<sub>33</sub>というリーダー格の学生に対して、好意をもち、それに伴う、相互作用の頻度も高まり、行動を共にすることになる。さらに、A<sub>33</sub>と行動を共にすることによって、A<sub>51</sub>とも相互作用をする。という具合に、このグループの核であるダイアド関係との結合が生じる。また、A<sub>33</sub>に対する、指導的性格の類似性や、信頼感依頼感などから、相互に補完性を見出し、それ

によって、形成される規準のグループが考えられる。いわば、この7名のグループでは、A<sub>33</sub>A<sub>60</sub>A<sub>54</sub>という関係が、お互いに、指導的性格によって、類似した決定を下したり、意見をもつというように、気の合ったものの結合で、合意によって、構成されているといえよう。そして、その他は、A<sub>33</sub>に対するA<sub>51</sub>のばあいのように、対照的な性格によって、相互に異った報酬を、与えることのできる、いわば、共生という結合形式を、もっているといえる。したがって、第3の規準として、合意および共生によるものが、あげられてよからう。最後にA<sub>10</sub>とA<sub>42</sub>のばあいは、これまでの3つの規準に、あてはまらないものであり、下宿通学ということに、よるものである。さらに、寮生側のA<sub>43</sub>A<sub>62</sub>A<sub>15</sub>のばあいも、A<sub>43</sub>とA<sub>62</sub>が同じ寮に属して、ダイアド関係にあった、他方A<sub>15</sub>は、他の寮に属している、A<sub>38</sub>と知己であったが、6カ月目に、A<sub>43</sub>A<sub>62</sub>との間に知己量を増加し、さらに、3人グループを形成した。同じようなことは、他の学生の間にも、多くみうけられる。これらの例は、いづれも、同じ寮に所属している、ということに、直接の契機がある。したがって、第4の規準としては、生活の場の共有、ということがあげられる。そして、総じて、寮生集団の側に、この規準に、あてはまるものが、多い考えられる。さらに、寮生集団には、グループを形成していないで、単に知己による、結合関係が多いということも、特筆すべき点である。たとえば、A<sub>21</sub>を中心とした6名が、その明白な事例といえる。すでに分析したように、13名のかなり強固な結束が、入学当初にみうけられたが、それから、1年余を経た、グループ分析では、A<sub>21</sub>A<sub>37</sub>A<sub>17</sub>A<sub>26</sub>A<sub>38</sub>のみが、結合関係を維持している、という状態である。

以上で、クラス集団の細部にわたる、分析の論述を終ったわけである。これらを要約すると、つぎの諸点があげられよう。

第1に、寮生と通学生という、2つの集団像の存在、第2に、それらにもとづいて、形成される、小グループがある、ということである。

第3に、総じて、寮生の方が、グループ結合よりも、単に知己による結合——グループは、全人格的な結合で、協同集団であるのに対し、知己による結合は、競争集団といえる——が、支配的であるという3つの点である。

註

1. sociometry とは人間の心理学的属性 (psychological properties) の数学的研究であって、経験的技術と数学的把握の方法の適用によって得た結果にもとづくものであって、モレノによると、ラテン語の socius —社会の意味—と metrum—測定の意味—の合成語をその起源としている、この体系は J.L. モレノによってアメリカに流布されたものである、なおこの間の事情は J.L. Moreno, Who shall survive? 1953. に詳述され理論大系も理解できる。
2. sociogram は、本来個人と個人あるいは集団対集団の間の社会的距離が記述されるものであるが本文ではやや変型されたターゲット・ダイアグラムの性格のものを用いている、これは選択数の多少によって多く選択をうけた人間を中心において描くやり方である
3. 関心度は集団凝集の測定の手がかりともなるもので一般につきのように算出されている

$$I = \frac{N_1 \cdot n}{P}$$

I は関心度

$N_1$  は小集団の大きさ (成員数)

n は限定された選択数

P は選択された実際の数

<3>

これまでの論述から、具体的な問題として、大きくは寮生対通学生、小さくは、小グループ間のコミュニケーションの問題について、究明が必要となってくる、端的にいえば、形式的なコミュニケーションはみうけられるが、非形式的なコミュニケーションがないことである。この点は、1つの目標に——たとえば、文化祭など——むかって、クラス集団の移行が必要ならば、学生間の緊張を生じる原因となる。いわば、これまでの知己テスト、ソシオメトリックテスト、ソシオグラムなどから、緊張を解消する手段の発見が、必要になってくる。

まず、考えられることは、寮生と通学生の集団像のもつ、それぞれ異なる価値感や、態度の中間にある、と思われる、下宿通学生の役割であ

る。しかし、すでにのべたが、入学当初は、寮生集団にくみ入れることが、可能であるが、時間の経過と共に、通学生集団に併合されてしまう。したがって、融合のための役割を期待することは、不可能である。とうぜん、ここで、リーダーの問題が、生じてくる。周知のことであるが、モレノは、個人の自発性の犠牲、ということなしに、個人の適応の可能な集団へ、編入させるということをハドソンにおいて実証し、さらに、家族単位による、新しい地域社会の居住集団の構成、ということをも可能にした。ひるがえって考えるなら、これらは、つねに、個人あるいは、家族を単位とする、集団生活の過去、現在、未来という、時間的な経過が考慮されていた。学校集団のばあいのように、クラスシステムが、確立しているばあい、とうぜん、モレノによる、集団再編成の手続きを、そのまま適用することは、不可能である。そして、2において、詳述したように、いくつかの規準にもとづいた、グループが存在しているばあい、民主的な凝集の方法としては、各グループにある、成員の価値、および態度の変容なしに、集団移行が必要となってくる。したがって、究極的には、それらのグループの規範にない手としての、リーダー間のコミュニケーションと、相互認知が必要となってくる。具体的には、ソシオグラムの分析を中心に、リーダーの折出をしようと思う。入学直後のソシオグラムから、 $A_{21}$ が潜在的に、リーダーとしての属性をもつ、学生であるように思えた。すなわち、知己テストによる、相互認知の量が多い、ということと、5つの寮の所属成員との間に、それらの知己量が分布している、ということに起因する。しかし、2カ月後のソシオグラムにあっては、知己量の変化はなく、むしろ、 $A_{63}$ の方に知己量の増加があった。なお、共同製作のための、ソシオメトリック選択の結果は、 $A_{21}$ が誰からも選好されていないことが、わかった。しかし入学後9カ月目のソシオグラムでは、 $A_{21}$ の知己量が増加していることがわかった。このことは、 $A_{21}$ は、人気のある学生であるが、創始、



統合、編成、製作という、リーダー的性格の基準をもたない、といえる。すなわち、基礎的パーソナリティに、リーダーとしての属性があっても、学校において、学生および教職員によって、リーダーとして承認され、社会的役割が、附与されない限り、あくまでも、小グループの中心人物であって、クラス集団のリーダー、とはいえないであろう。第2に、A<sub>33</sub>を分析してみよう。2において分析したが、A<sub>33</sub>は通学生で、きわめて積極的なリーダーといえる。すなわち、女子学生のばあいには、積極的に、自己の立場を、主張するということが、周囲よりの信頼という感情に、つながってくる。そして、クラス委員という、学校での社会的役割が与えられ、学校当局と学生の間にあって、方針の伝達や、学生の態度の代表、という点でも、リーダーとして、顕在化したわけである。そして、成員数の多いグループに所属している。しかし、知己量が、そのグループ内に、固定してしまっている、ということで、形式的な伝達は、一方的になる可能性が、濃厚とも思える。さらに、問題となるのは、寮生集団との、インフォーマルな交流がない、ということである。このこと自体、いくつかの小グループの固定性、と相まって、現在、対象としているクラスにあって、集団移行の促進を可能にする力とは、いえない。このような結果、必然的に、A<sub>60</sub>の分析が、必要になってくる。A<sub>60</sub>は、通学生集団のグループに、属しているが、寮生集団のグループとも、相互作用がある、という点で、A<sub>33</sub>に比して、より望ましい、リーダーといえる。入学直後のソシオグラムでは、まったく孤立していた学生の1人である。2カ月後には、2人と相互に知己結合がみとめられる。しかし、入学

後、6カ月経つと、2カ月後の関係は、消滅してしまい、9カ月になると、知己量はかなり増加している。これをひとごとでいうなら、カトリック教義の雰囲気をもつ、学生であって、年長者である、という点と相まって、多くの友人を、生活時間の長さ に比列して、もつことの出来る学生である、ことによるものである。同時に、種々のばあい、創始者となって、活動する学生である。また、クラス委員としての地位、および役割と相まって、積極的な活動と発言、という点で、多少、A<sub>33</sub>と異ったリーダーといえる。もっとも、ソシオグラムから、よみとった、リーダーの分析では、不十分であるが、現在の問題状況においては、このような方法が、かなり有効であったと思う。そして、各々の小グループの中心人物、またはリーダー間のコミュニケーションの促進こそ、学生間の緊張の緩和にとって、必要な条件であり、一般的にあって、リーダーの教育ということも、大衆社会化状況において、集団操作の戦略的な手段と、いえるのではなからうか。リーダーの論述については、ホマンズによる、ノートン街の児群の分析<sup>(1)</sup>、ヤングのリーダーの類型<sup>(2)</sup>、ギップの分析<sup>(3)</sup>、リドルの指導の10の形態<sup>(4)</sup>、コンウェイの類型<sup>(5)</sup>、などに学ぶべき点があるといえよう。

#### 註

1. G. C. Homans, *The Human Group* 1950 P161
2. K. Young, *Social Psychology* 1956 P251~4
3. A. Hare & others, *Small Groups* 1955 P87~94 The principle and traits of leadership.
4. A. Hare & othes, *ibid* P73~82 Group emotion and leadership.
5. K. Young *Social Psychology* 1956 P270 The crowd in peace and war.